KUMADAI TSUSHIN

熊大通信

Vol.25
Jul.2007

特集 知と社会 Vol.25

水害に備える
大学の「知」と地域の協働

Kumamoto University

国立大学法人 熊本大学

Upgrade Unique Union Universal
KU4U

熊本大学の約束(KU4U)

Kumamoto University For You

私たちは、熊本大学を
開かれた心地よい環境の大学として、次の4つのことに全力を投入します。

Upgrade
未来を生き抜くプロフェッショナルの養成

Unique
新たな知的価値の創造

Union
地域連携と社会貢献

Universal
留学生教育と国際貢献

CONTENTS

1 巻頭 TOPICS
女性がもっと活躍できるキャンパスに
熊本大学・男女共同参画の取り組み

2 知と社会 Vol.25
水害に備える
大学の「知」と地域の協働

6 夢の実現 Act.13
薬学研究は、人生をかけるにふさわしい
熊本大学大学院 医学薬学研究部 教授 甲斐 広文

8 地域とともに
法律をもっと身近に
医学部をモデルにした臨床教育
熊本大学大学院法曹養成研究科附属臨床法学教育研究センター(ローセンター)
弁護士法人 大知従法律事務所 熊本リーガル・クリニック(ローファーム)

10 卒業生を訪ねて
出会いは人を磨き、世界を拓いていく
『NEXTEP』代表・小児科医 島津 智之さん

12 国際交流
海外へ向かう職員たち
大学の国際化を支える力に
熊本大学総務部総務課 坂﨑 直美

14 熊大 INFORMATION
おすすめの一冊 熊本大学五高記念館 准教授 岩崎 竹彦
CAMPUS 歴史さんぽ

表紙 Hippopotumus 材料(新聞紙、紙粘土、木)幅32 奥行き55 高さ45(cm)

作者／中村靖浩 NAKAMURA YASUHIRO

プロフィール：熊本県天草生まれ。熊本大学教育学部美術科卒業。ゲーム制作会社でグラフィックデザイナーとして7年勤務。現在、紙を使った立体作品を中心に制作、活動中。
http://www1.neweb.ne.jp/wb/spankposs/

コメント：カバです。首だけの制作ですが、置いている場所が池などの状況に見えたらしめたものです。カバは、キャラクターイメージとして凄く優しい感じがありますが、全ての動物の中でも、もっとも危険な野生動物です。紙の作品は、少し荒めの表面処理を残すことによって、手触りや存在感を感じられるようにしています。

女性がもっと活躍できるキャンパスに

熊本大学・男女共同参画の取り組み

今年3月26日に「男女共同参画推進基本計画」を策定するなど、全学的に女性研究者が活躍できる環境整備を進めている熊本大学。5月18日には、教職員や学生の男女共同参画への意識啓発を目的に、日本IBM株式会社最高顧問であり社団法人経済同友会終身幹事を務める北城恪太郎（かくたろう）氏を招いて講演会を開催しました。

北城氏（左）は講演に先立ち本学の﨑元学長（右）と歓談

女性研究者に優しい環境は全ての研究者も満足できる

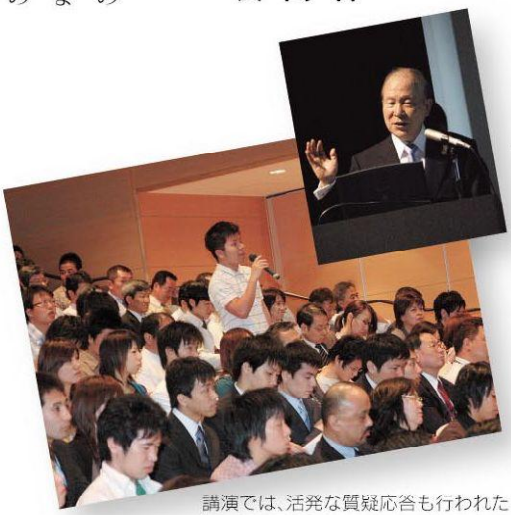
日本の大学の現状をみると、育児や介護に直面した女性研究者が研究活動を中断または辞退するケースが多々あり、解決すべき課題は山積しています。本学ではこのような事態をなくそうと、文部科学省が平成18年度に公募した科学技術振興調整費の課題プログラム「女性研究者支援モデル育成」事業に応募。全国で10校が採択され、本学の「地域連携によるキャリアパス環境整備」がその一つとして選ばれました。

事業では、熊本県、熊本市や子育て支援NPO、地域企業などと緊密に連携しながら、勤務体制に関する環境整備、研究と育児等を両立するための研究代替員の対応・研究費の予算配分としての助成、全学的な保育援助システムの整備などを進めることになっています。この事業で構築した女性研究者の育成支援体制は3年間のモデル事業終了後も継続します。

女性の活用は立派な企業戦略そのためにも環境整備が重要

この事業の一環として、日本IBM株式会社最高顧問であり社団法人経済同友会終身幹事を務める北城恪太郎氏を招いての講演会を開催。北城氏は、「21世紀における地域からの挑戦～人材のイノベーション」と題して、意欲と能力のある女性の活躍の必要性について、「女性を長期戦力として活用することが重要。このことは福利厚生ではなく、女性の人材活用自体が企業戦略である」と示唆。「例えば、男性と女性が同じ能力であれば、現状で女性の管理職が少ないだけに、当然女性を管理職に登用。採用枠の3割を女性枠とすれば、管理職もその比率枠となり、優れた人材を大いに活用できます」。北城氏はそのためにも、やはり「環境づくりが重要」だと語り、また多様性の取り組みの重要事項としても、女性の能力活用を第一に挙げています。

本学の男女共同参画の取り組みが、女性研究者だけでなく全ての研究者にとってよりよい研究環境整備となり、それがひいては本学の研究成果の向上につながることが期待されます。



講演では、活発な質疑応答も行われた

「特集」知と社会 Vol.25

水害に備える 大学の「知」と地域の協働

2004年7月発行の本誌13号の特集では「変わる地域防災 ～防ぐから減らすへ～」と題し、「防災」をテーマにした熊本大学の研究を紹介し、地域社会における大学の役割を探った。あれから3年。熊本大学は研究をさらに深める一方で、その「知」をより具体的に地域社会へ還元しようとしている。今回は、2006年熊本市壺川校区の地域住民と協働して水害に対する地域の防災力向上を図った実践的研究から、大学による地域貢献の新局面を報告する。

特集

柿本竜治政策創造研究教育センター准教授

「天災は忘れた頃にやってくる」

熊本大学の前身・旧制五高で学び、夏目漱石の弟子としても知られる物理学者・寺田寅彦は「天災は忘れた頃にやってくる」という言葉を残した。今、この言葉の意味を噛みしめ、地域社会に警鐘を鳴らしているのが、熊本大学政策創造研究教育センターの柿本竜治准教授をはじめ、「地域防災」の研究に取り組む研究者たちだ。

「河川改修により高い堤防が築かれると、実際に水害が起きる確率は減少し、"これで安全だ"と考える人たちが増えます。しかし近年、災害は常に想定外の被害をもたらし、災害後のリスク（「被害の期待値」と呼ぶ）は以前よりもずっと大きくなっています」という柿本准教授。

リスクの背景には、都市化による土地利用形態の変化や地域に水害経験者が少なくなり、過去の水害経験が蓄積されていないこと、などがある。また、都市化が進むとともに近所づきあいが減り、地域に存在していた相互扶助のコミュニティが失われ、幼い子どもや高齢者など「災害弱者」と呼ばれる人たちが孤立する傾向にある。

こうした中、13号の特集では、災害時の的確な初動対応や地域の自主防災組織の必要性、またハード・ソフト両面から災害時のリスクマネジメント（※1）を考え、「防災」から「減災」へとシフトしていくことの重要性を明らかにした。と同時に、大学の研究者たちが地域防災に関する研究を「実際に社会で役立てたい」と考えていることを示した。

この考えを一歩進め、大学の研究成

住民の意見を反映したオリジナル防災・避難経路マップの一例

WS(防災・避難経路マップづくり)の様子

果を地域に還元し、地域住民とともに地域の防災力を高めるための具体的な試みの一つとなったのが、昨年、熊本市の壺川校区で行った「水害リスクコミュニケーション(※2)地域防災力向上のための実践的研究」だ。

※1企業経営などで用いられる組織防衛のための概念を応用した防災の考え方。想定される災害リスクをできるかぎり抽出し、その対応策を予め検討・実施するとともに、その結果を評価して事前の環境改善に結びつける一連の行動指針。

※2水害におけるリスクマネジメントの中でも、特にコミュニケーション(行政と地域住民が双方向で情報を共有したり、住民が災害情報をより正確に知ることができるようにしたりする)を促すことで、水害のリスクを減らすための方法。

地域に即したオリジナル防災避難経路マップづくりを支援

熊本市の中心部からやや北寄り、世帯数約4000、人口約8400人の壺川校区には、過去に何度も氾濫した2級河川の坪井川が流れている。現在は1957年7月の大水害当時の流量毎秒320m^3を基準にした河川整備が進められているが、標高10m程度の低地区の水害リスクは依然として高い。そこで、柿本准教授たちは、地域住民と一緒に同校区の水害に関する情報を共有し、効果的な避難支援を、ワークショップ(以下、WSと略)や避難訓練などを取り入れた「水害リスクコミュニケーション」のモデル事例として研究した。

第1回のWSは2006年1月、壺川公民館で開かれ、壺川小学校PTAや校区自治会などの地域住民33名、行政やNPO関係者各1名、大学関係者14名が参加した。「熊本市では2005年6月に市中心部を流れる1級河川である白川の洪水ハザードマップを作成していますが、この情報はまだあまり活用されていません。マップの見方がよく分からないという人も多いようです。そこで、WSではこのハザードマップの見方を住民の方たちに説明することから始めました」という柿本准教授。

「熊本市中心部を流れる1級河川の白川は川床が周囲の地面よりも高い天井川で、白川が氾濫すると市役所の2階まで水に浸かります。と同時に、坪井川の水位が上昇し、壺川地区でも氾濫する危険性が高くなります」という説明に、参加した住民たちは一様にドキッとした表情。続く校区独自の防災・避難経路マップづくりでは、4つのグループに分かれ、現在の避難場所や避難経路を地図上に再現。「以前にがけ崩れがあった」、「坂道なので流れ込む水が危険ではないか」といったそこに暮らしているからこそ知り得る情報や危険に感じている場所などを、自分たちで話し合いながらマップに書き加えていった。

大学の"本気"が地域に浸透する時

翌月の第2回WSでは、坪井川流域の過去の氾濫状況や近年頻発している局地的な集中豪雨などを踏まえ、大学院自然科学研究科の山田文彦准教授が行った氾濫シミュレーションの結果を説明した。

山田准教授は、航空機レーザープロファイラーの標高データから家屋1軒が認識できる5m間隔の格子で計算、氾濫の進行状況をアニメーションにして住民に見せ、「坪井川の氾濫からたった2分で現在の避難場所となっている壺川小学校に氾濫水が到達します」と説明した。

こうした大学の意欲的な取り組みに、住民たちは「洪水に際して避難するのは自分たちだ」と関心が喚起され、前回以上に活発な議論が交わされ、オリジナル防災マップの精度がさらに高められた。

そして、水害シーズンに突入した6月の第3回WSでは、内水・洪水氾濫の仮想シナリオ(解析結果に基づき作られた、このように洪水が起きるので

子どもから高齢者まで多くの人が参加した避難訓練の様子

はないかという予想）に沿ってオリジナル防災マップ上で仮想の避難訓練を実施。その成果が活かされ、8月から9月にかけて、水害時に避難所まで徒歩で避難する場合を想定して、氾濫水の広がりによる通路の遮断（トラップ）を考慮した避難訓練計画を校区まちづくり委員と壺川小PTA役員たちと共に策定。10月にはいよいよ実際に水害避難訓練が実施された。

避難場所として指定されている壺川小学校は浸水の可能性が高いことから、今回の避難訓練では京町台地にある壺川コミュニティセンターが避難場所となった。大学や行政関係者たちがサポートする中、訓練には子どもから大人まで52世帯86名が参加。電話連絡網で避難指示を受けた後、時間の経過とともに遮断された通路を避けながら避難場所まで歩いて避難した。

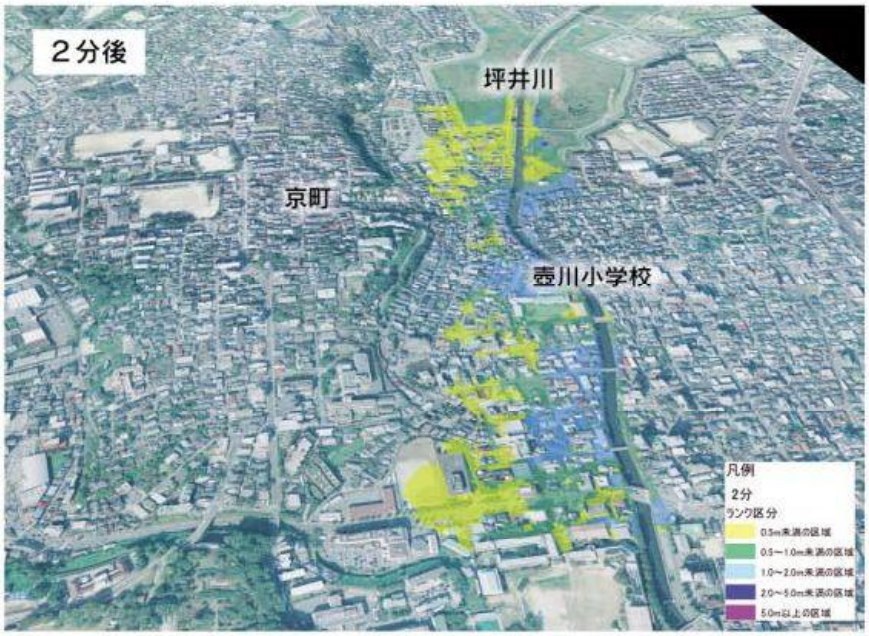
避難指示の電話連絡にかかる所要時間からすべての参加者の避難完了まで、訓練の状況を詳細に記録、調査した山田准教授たちは11月の報告会でその結果を住民にフィードバック報告した。避難場所まで歩いていくことが困難な高齢者や障害者などへの配慮のほか、自宅から10～20分程度の徒歩圏内に避難所を複数設置するなど、さらにきめ細やかな計画の必要性などを提言。大学と地域とが「知」をキャッチボールすることで、実践的な避難計画が策定できたといえる。

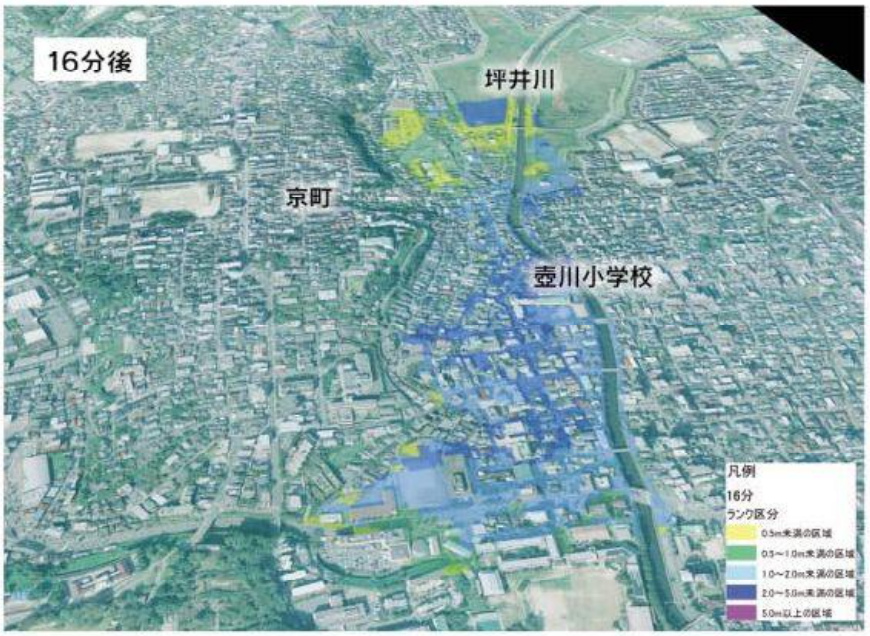
WSの前後で実施した水害対策の意識変化を尋ねるアンケート調査では、WS参加後、住民の意識は「公助（行政による救助）」の意識が低下し、「自助（住民自らが身を守る）」や「共助（住民同士がお互いに助け合う）」による防災意識が高まる傾向にあることが確認された。一連の研究に参加した住民たちも「自助」や「共助」が減災につながることを改めて認識した。

「防災・減災」意識の高まりと広がり

WSのファシリテーター（進行役）など、大学と地域の間の橋渡し役として参加協力したNPO法人九州流域連携会議の岡裕二事務局長は「最近は大学が地域に入ることも増えてきましたが、今回のように地域と一緒に動くことはまだ少なく、有意義な研究だったと思います。データの取り扱い方など、

洪水氾濫シミュレーション結果の一例





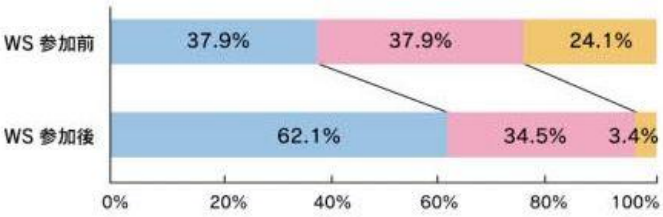
氾濫 2分後には壺川小学校に氾濫水が到達し、16分後には 2.0～5.0m の高さになると予測される。

特集

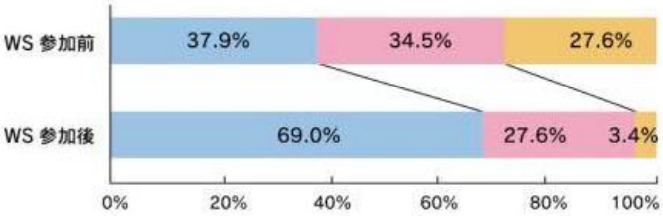
ワークショップ(WS)参加前後で比較した地域防災に対する意識の変化

WSに参加したことで、注意報・警報の発令時や災害時ともに、「公助(行政による救助」への依存度が低下し、「自助(住民自らが身を守る)」や「共助(住民同士がお互いに助け合う)」の意識が高まる傾向にあることが確認された。

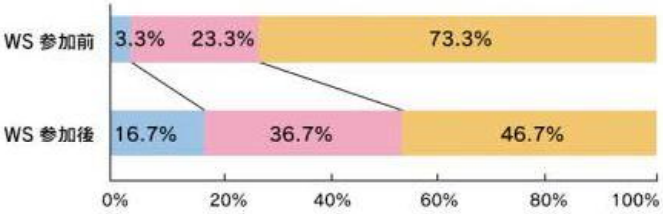
【注意報・警報発令時の避難の判断】



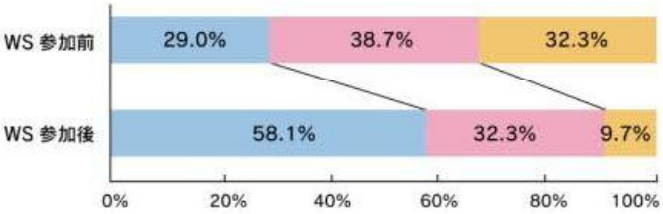
【注意報・警報発令時の避難準備】



【災害時における飲料水など物資の手配】



【災害時における避難の判断】



山田文彦大学院自然科学研究科准教授

さすがは大学の先生たちだと思いました。これからも地域と一緒に動いて欲しいですね」と話している。

また、WSの記録係などを務めた大学院自然研究科修士2年の坂西由弘さんたち学生は今、他の学生たちにも呼びかけて「大学生による災害ボランティア」を立ち上げようとしている。「災害が起きてしまった後、全国から集まってくれるボランティアの受け皿となり、組織的な災害復興活動ができる体制をつくる、言わば縁の下の力持ち的なボランティア組織です」と語る坂西さん。地域での経験が自主的な活動を始める原動力になっている。

柿本准教授たちは今年度、熊本市中心部の商店街でも水害リスクコミュニケーションによる研究を行う予定だ。行政の厳しい財政状況もあり、地域防災の軸足は「公助」よりも地域の「自助」や「共助」に求められるようになっている。柿本准教授は「今度は日頃地元にいない買い物客や商店街、特に浸水の危険性が高い地下にいる人たちをどう避難させるかを皆で考えていきたい」と抱負を語る。熊本大学は、地域の皆さんの協力により研究し、教育し、かつ地域への貢献を果たすよう取り組みを続けている。

大学院自然科学研究科
修士2年の坂西由弘さん

夢の実現 Dreams come true Act 13

大学院医学薬学研究部　先端生命医療科学部門
分子機能薬学講座　遺伝子機能応用学分野
（薬学教育部　分子機能薬学専攻、薬学部　薬科学科）

教授 甲斐 広文

薬学研究は、人生をかけるにふさわしい

「たった一つの薬が世界の医療を変えることがある―だからこそ薬学研究には夢がある」そう語る甲斐教授。毎日の早朝セミナー、海外派遣など独自の教育システムを展開し、研究室からは多くの優秀な人材を輩出しています。その源には教授の『創薬』に対する熱い思いとチャレンジ精神がありました。

学生たちに自分が学生の頃やりたかったことをやらせてあげたい

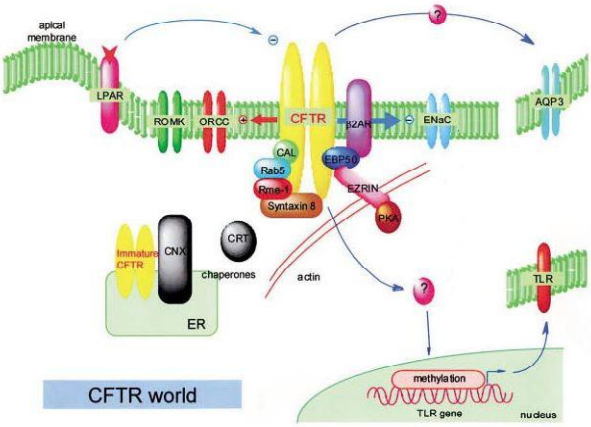
甲斐教授の研究室の1日は朝7時半の早朝セミナーから始まります。中心となるのは学生たちによるプレゼンテーション。英文論文、関係資料を読み込み、自らがあたかもその研究を行ったかのように発表するのだそうです。「この訓練によって、発表の仕方だけでなくスライドの作り方など、プレゼンテーション全般の力と質疑応答能力が高められ、同時に自立して研究する力が養われるんです」と教授はセミナーの効果を語ります。また、朝に行うことで脳が疲れていないため理解度が増すとともに、1日が有効に使えるという利点も。「とにかく自分が学生の頃にやりたかったことをやらせてあげたい。そういう環境を作ってやりたい」という教授。7年ほど前から独自の海外派遣制度も確立し、現在も3名がニューヨークのロチェスター大学等で勉強中だとか。これまで約10名の博士課程の学生がアメリカの大学へ研究者待遇で派遣されたそうです。

優秀な人材を数多く輩出し、昨年度は国家公務員第1種試験に2名の合格者を出すという快挙も、教授の学生たちへの愛情がもたらしたものと言えそうです。

糖尿病予防に胃かいよう治療にそして農業にも、可能性が広がる『微弱電流』の効果

現在、研究室では学部4年生5名と大学院生など30名のスタッフで遺伝

難病の原因蛋白質の細胞内分子ネットワーク図



CFTRとは、ねばりけのある分泌物が気管支やすい臓などの器官につまる難病の嚢胞性線維症（のうほうせいせんいしょう）の原因となる生体分子のことで、この図はCFTRが細胞内でさまざまな他の生体分子と相互に作用し、病気の発症に関わっていることをまとめたものである。

甲斐教授たちが現在開発中の「バイオメトロノーム」。生態に温熱と微弱電流を同時に供給することができ、内臓脂肪の減少効果などが期待されている。

早朝セミナーの様子

病、癌の新規治療手段の開発や自然免疫制御機構の解明のための研究を進めています。「患者数の少ない病気をターゲットにした創薬研究が大学の使命だと考えています。一方でその成果をもとに、一般的な複合疾患（生活習慣病など）の治療薬開発への糸口も探りたい」と語る甲斐教授。その言葉通り、癌の温熱療法の研究過程で新たな発見がありました。「地元企業から熱と電流を同時に負荷できる合成ゴムを製作したとの報告を受け、それがきっかけで熱と特定の波形の微弱電流の同時処置の生体に対する影響を調べました。その結果、予想以上のさまざまな効果が現れ、特に、内臓脂肪の減少作用は、糖尿病などの予防に応用できると、糖尿病学会からも注目されています。他にも胃かいようなどの疾患にも有効な手法である可能性があります」。この治療機器はすでに特許申請済みで、昨年クマモトバイオビジネス大賞を受賞、県をはじめ国、大手企業、商社、銀行などがバックアップを申し出ており、大型共同研究開発事業へと展開しつつあるそうです。

一方、微弱電流には植物の成長を促進させる効果があることもわかり、東京大学農学部との共同研究も進められています。

難病で苦しむ伯母を見て医療の道へ

甲斐教授は子どもの頃、実の母親と別にもう一人、母のような存在があったそうです。それは母親のすぐ上の姉で、難病を患っていた伯母さんでした。「家が近くだったので小さい頃からよく泊まりに行って、可愛がってもらっていました。伯母は20歳のときに難病を発症し、結局、結婚もできませんでした」。その伯母がホルモン剤の副作用で苦しむ姿を見て、「何かできないだろうか」と思ったのが、医療関係に進むきっかけになりました。「薬学研究者となった今、相対する患者だけでなく、創薬で世界中の難病に苦しむ人をも救える。それが薬学研究の醍醐味です」

来たれ、次世代研究者

「薬学部は、化学、物理、生物、臨床（薬学）などあらゆる理系の学問を学びます。薬学研究者は総合的な力を持つサイエンティストと言えると思います」

たった一つの薬が世界の医療体制を変えることもある―薬学研究はそんな夢のある仕事だと力を込める甲斐教授。「現在の医療体制は先輩たちが築いたもの。10年後、20年後の薬を創って未来の医療体制を築いていくのは次世代の研究者たちです。創薬研究は人生をかけるにふさわしい仕事だと思います。皆さんもご存知のガスター（胃かいよう薬）やアリセプト（認知症薬）などの開発にも、本学の卒業生が関わっています。"歴史に生きた証を残す"。そのくらいの意気込みで、若い人たちにも薬学研究者を目指してほしいですね」。

PROFILE

甲斐 広文（かい・ひろふみ）

1960 年宮崎県椎葉村生まれ。熊本大学薬学部製薬学科卒業。熊本大学大学院薬学研究科修士課程修了。エーザイ株式会社筑波研究所研究員、熊本大学薬学部助手を経て文部省（現文部科学省）長期在外研究員としてカリフォルニア大学へ。帰国後、熊本大学薬学部助教授、2000 年より教授。薬学博士、第一種放射線取扱主任者。2004 年より、サプリメントの機能を持つパンの商品開発などを行う大学発ベンチャー、セレンディップ研究所㈱研究開発担当取締役兼任。

ローセンターで、市民からの法律相談を受ける田中俊夫大学院法曹養成研究科教授（弁護士）＝写真中央＝のそばで研修する学生たち。

地域とともに

熊本大学大学院法曹養成研究科附属臨床法学教育研究センター（ローセンター）
弁護士法人　大知従法律事務所　熊本リーガル・クリニック（ローファーム）

法律をもっと身近に
医学部をモデルにした臨床教育

平成18年11月、熊本市花畑町に開設された「熊本大学大学院法曹養成研究科附属臨床法学教育研究センター（ローセンター）」。「ローセンターがあるのは、九州では本学と九州大学の２校だけ。全国でも先駆的な取り組みです」と、本センターの立ち上げを担った山中至大学院法曹養成研究科長（ローセンター長）。本センター内の熊本リーガル・クリニックでは、弁護士法人と連携・協力しながら、学生が立ち会う無料の法律相談を実施しています。敷居の高いイメージのある法律事務所で無料相談が受けられるとあって、最近半年間では約20件の相談がありました。また、学生にとっても、社会で起きている法的紛争を肌で実感できる絶好の機会となっているようです。

ローセンターは、熊本市役所近くのビル４階にあります。

地元住民の心強い味方

熊本リーガル・クリニックとは、誰でも気軽に利用できる"法律の診療所"。相談者の同意を得た上で、熊本大学法曹養成研究科（以下、法科大学院）の学生が弁護士と一緒に立ち会い、無料で法律相談を行っています。一般の法律事務所と同様、相談内容は離婚や相続、借金、労働問題までさまざま。依頼者の方の話を聞き、問題解決へ全力で取り組みます。

現在、法科大学院3年の学生9名が、授業の一環としてリーガル・クリニックに参加。弁護士の横でメモを取りながら、法的に意味のある事実を聞き出したり、資料を収集して法文書を作成したりして、問題を解決へと導く中で、実践的な応用力を学びます。

大学院法曹養成研究科長の山中 至教授

相談に立ち会う学生以外は、別室のモニターで相談の様子を見ながら、記録を取ります。

いつか熊本に恩返しを

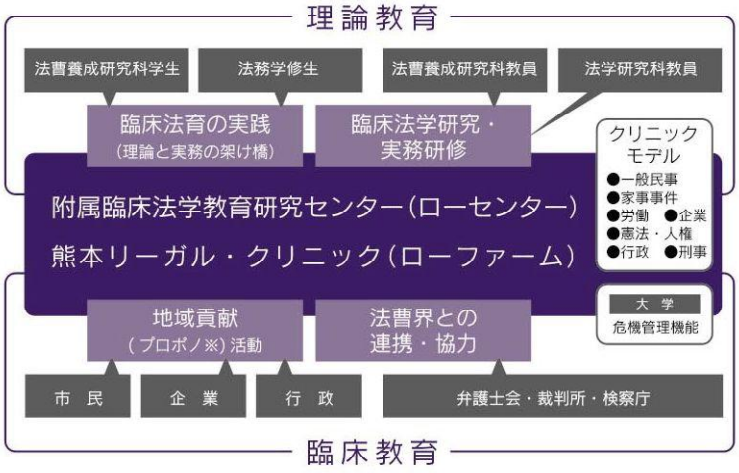
リーガル・クリニックに参加している法科大学院3年の尾浦愛美さんは、「初めて相談を受ける前は緊張しました。相談内容については、皆とよくディスカッションをします。いろんな意見が聞けて勉強になります」。同・吉永真理子さんは、「学校で勉強していないことも相談に来られるので、そこが大変でもあり、やりがいを感じます」。同・松村尚美さんも「相談者の方の話を聞きながら、この要件を満たすためには事実として何が必要なのか、先生がこの質問で何を聞き出そうとしているのか、と考えるので、日々新たな発見があります」。また「司法試験に合格して熊本で活躍することで、相談者の皆さんの話を聞いて勉強させていただいた恩返しができれば。今後、この取り組みをきっかけに、皆さんがもっと気軽に法律相談ができる環境になればうれしいです」と、吉永さんは今後の抱負を語ります。学生たちの言葉からは、与えられた臨床法学教育の好機を無駄にしないよう、真剣に取り組む姿勢と熱意が伝わってきます。

learning by doing で法曹人材を輩出

「リーガル・クリニックは、地域への貢献はもちろん、学生にとっても具体的な事件を通して応用力とともに法曹倫理を身につける絶好の機会」と、山中教授。「ローセンターでは、医学部をモデルとした臨床教育により、21世紀を担う法曹を地域に輩出することを目指しています。重要なのは"learning by doing"。司法試験に出るところだけを部分的に勉強するのではなく、実務と融合する臨床教育を学び、学生に体系的で生きた応用力を身につけてもらいたいですね」。

今年から、法律について相談する機会や場所の少ない県内の過疎地域でも、出張相談を行っていく予定。「いずれは、ローセンターと地方の拠点、熊本大学の3地点をインターネットでつないで、法律相談をすることも考えています」と、山中先生。「地方では法曹不足が深刻です。夢は、ローセンターで学んだ学生たちが、修習を終えてセンターに戻り、若い法曹をどんどん育てて地域に送り出してくれること。医療の世界で大学の附属病院が果たすような役割を、このセンターが果たしてくれればいいですね」。

熊本リーガル・ネットワーク構想



※プロボノとは、一般に無報酬の弁護士活動を指し、本構想では社会に対するリーガル・サービスの提供を意味する

上）自分たちで植えたピーマンを収穫し、畑で生のまま頬張る子どもたち。（NEXTEP の自然体験学習）
下）パッチ・アダムス氏の夢とパフォーマンスが多くの人に感動を与えた「パッチ・アダムス九州講演会」（2004 年・熊本市）

『NEXTEP』代表・小児科医 **島津 智之**さん

PROFILE

島津 智之（しまづ・ともゆき）

1977年福岡県生まれ。2000年、医学部６年生の時に“多くの人と出会い、自分を磨き、未来を夢描くために『NEXTEP』を設立、代表を務める。現在、熊本再春荘病院小児科勤務。一児の父。

出会いは人を磨き、世界を拓いていく

子どもが大好きで小児科の医師になったという島津智之さん。大学2年の時に参加した国際ワークキャンプがきっかけで、人との出会いの大切さを実感したといいます。その経験を基に、在学中に、世代や職種を超えた交流・学びの場『NEXTEP（ネクステップ）』を創設、代表として活動してきました。一方では、小児科医として研鑽を積み、子どもたちのよき理解者として活躍中です。組織の代表と医師という二つの重責を担いながらも、穏やかな語り口と柔和な雰囲気を持った島津さんに、お話をうかがいました。

子どもと関わる職業を

子どもの頃から、テレビドラマや尊敬していた担任の先生の影響で、教師という職業に憧れていました。子どもたちと一緒に悩んだり、何か役に立てることに魅力を感じたのだと思います。それが職業になるなら一番だ、と思うようになっていて、漠然とですが教師になることを考えていました。その後、より親身に、広範囲に子どもたちと関われるのは小児科の医師かなと思い、医学部へ進みました。迷いはなかったですね。大学生活の最初の2年間ぐらいは、テニスに明け暮れていました。それはそれで楽しかったんですよ。

「魅力的なおとな」

20歳の時、東京に本部を持つNPO法人『ナイス』が主催する国際ワークキャンプに参加して、世界各国から集まった同世代の人たち20人と共に、水俣で過ごす機会がありました。全員が初対面です。けれど、言葉や文化、生活習慣の違いを乗り越えて、寝食を共にした後には、深い絆が生まれました。これはとても新鮮な体験でした。それから次第に、参加するだけでなく、コーディネートする側に回って、実にたくさんの人に出会いました。年齢や職業、経歴もさまざまな人たちですが、誰もがみんな、一言で言えば「魅力的なおとな」。そういう方が世の中にいっぱいいるんです。当時の僕には、大変なこととしか思えなかった仕事でさえ、なんだかとても楽しそうにこなしていて。それにひきかえ自分は、とコンプレックスを感じたこともありましたが、そんなことでしり込みしている間もなく、声をかけられて、役割を与えられて、どんどんとその輪の中に引き込まれていきました。たくさんの人と出会って、自分をみつめ、未来を拓いていく力を得る、いろんな人と繋がっていくことの大切さや魅力を実感してしまいました。

そして、次の一歩を

交流の場が身近にも必要だと感じて、自分の周りでつくり始めたのは、5年生の時、サークルとサークル外の人たちを繋ぐことからでした。学内から外へと活動が広がるうちに、本格的に組織するなら今しかない、と決心して、『NEXTEP』をつくったのは6年生の12月です。医師の国家試験も控え、かなり大変な時期だったんですが…。

『NEXTEP』は、共通の興味や特定のジャンルで活動をくくるのではなく、なるべく入り口を広く、接点をたくさん持とうという姿勢です。今まで、学生と経営者、学生と議員によるインターンシップ事業、自然体験学習、講演会開催などを手掛けてきました。中でも、2004年に開いた「パッチ・アダムス九州講演会」は貴重な経験でした。パッチ・アダムス氏(※1)は、最近日本でも知られるようになったケアリングクラウン(※2)の先駆けで、現役のお医者さんです。彼をモデルにした映画に感動して、初来日の時の講演会を東京まで聴きに行き、彼をどうしても熊本に呼ぼう!と。紹介をいただいて、直接お会いして頼んだんです。資金も1千万円ほど必要だったのですが、皆で手分けして、九州各県の医療・福祉関係機関、企業などに協力をお願いしてまわりました。当日は九州各県から2千人が集まりました。これが自信にもなり、また転機ともなって、医療・福祉・子どもといったテーマを基に活動することが多くなりましたね。2年前からは、畑を借りて子どもたちと一緒に農業に取り組んだりもしています。不安や悩みを抱えた子どもたちが、元気に生きていくことができるように、いろんな可能性に気づいてもらいたいと思います。近い将来には、子どもたちの居場所となれるフリースクールもつくる計画です。そこから世界を広げていってくれるといいなと思っています。

子どもの純粋な気持ちに接すると、学ぶことが本当に多い。でも、何よりも、子どもといると、僕自身が癒されるんです。人と出会い、関わることで、自分を磨いていける楽しさや価値、という点で、『NEXTEP』の活動と医師という仕事はどちらも大切だし、両立に無理は感じません。

可能性の選択肢を増やして

大学生活って、何かをなすには短いけれど、でも、時間はたっぷりありますよね。ぼんやりと過ごしてしまってはもったいない。自分のやりたいことを探す力、それを養う時間にしてはどうでしょうか。勉強でも、サークルでも、遊びでもいろんなことをたくさん経験することで、やりたいことが見えてくるはずです。それを教えてくれる人にも出会えます。まず、可能性の選択肢を増やすこと。それが大切ではないでしょうか。

※1 パッチ・アダムス氏
映画「パッチ・アダムス」のモデル。本名ハンター・アダムス。医学博士。心を病んだ自身の体験から、愛と笑いが人を癒すことに気づき、それを実践する医師となる。自らもクラウンとなって診療にあたる傍ら、講演・ワークショップ活動を展開。世界の紛争地や災害地へも訪問を続けている。

※2 ケアリングクラウン
病気や障害など、心身に何らかの苦痛や課題を持つ人に対し、「クラウニング」という手法を用いて、開放される時間を提供する道化師(クラウン)のこと。

International exchange

国際交流

海外へ向かう職員たち 大学の国際化を支える力に

熊本大学は大学のいっそうの国際化を図るため、平成15年度から事務系職員の海外研修制度を設けています。この制度により、今年2月から4月にかけて約2か月間、本学の交流協定校であるニュージーランド・マッセー大学で海外研修を受けた総務部総務課の坂﨑直美さんに研修の感想などをうかがいました。

事前準備でも多くのことを学びました

学生時代に約1か月間イギリスに語学留学しホームステイも経験したという坂﨑さんですが、「学生時代の留学は現地でのプログラムなどが細かく決まっていて、自分自身で準備することはほとんどありませんでした。でも今回は、現地の大学とのやり取り、生活やお金の準備まで、すべて自分でしなければならなかったので、かなり不安でした」と、研修前の気持ちを語ります。

そんな坂﨑さんの不安を和らげたのが国際課の支援です。さまざまな手続きを手ほどきし、"上手に話そうと思わないで。自分が話したいことを整理して積極的に話しかけて"とアドバイス。坂﨑さんは「とても心強かったです。今思えば、この準備の期間に学んだ手続きの仕方や心構えが、海外研修で学んだことの半分を占めているような気がします」とも。

研修生の立場になって気づいた"心遣い"の大切さ

事務系職員の海外研修は、語学研修と業務研修の2つの目的があります。坂﨑さんは、マッセー大学のランゲッジセンターで6週間の語学研修を受けた後、業務研修では、同大の図書館でも研修を受けました。実は坂﨑さん、総務

平成17年度に学内で行われた国際交流業務研修を修了してマッセー大学で海外研修を受けた総務部総務課の坂﨑直美さん。

国際交流 Report　平成19年3月～5月

3月6日／ 衝撃・極限環境研究センター、「第2回爆発・衝撃波および超高速現象に関する国際シンポジウム」を開催（9日まで）

世界各国から約240名の研究者が集まり、講演や研究成果発表が行われました。

8日／ 大学院法曹養成研究科、「法科大学院主催国際シンポジウム刑事クリニックの課題と展望ーハワイ大学ロースクールの実践に接して」を開催

ハワイ大学等の研究者による招待講演及びパネルディスカッションが行われました。

9日／ 韓国・培材大学校来学

15日／ 大学院自然科学研究科、「ナノスペースと材料に関する国際シンポジウム」を開催

大学院生による研究発表や、カリフォルニア大学等の研究者による招待講演が行われました。

16日／ オーストラリア領事館来学

17日／ 熊本大学、豪・ニューカッスル大学短期セミナー（4月3日まで）を実施

熊大学生6名が、オーストラリアで約三週間にわたって語学研修や体験学習を行いました。

19日／ ベトナム国立大学ハノイ校ハノイ科学大学と大学間交流協定（学術交流）を締結

20日／ エジプト・スエズ運河大学来学

23日／ 米・モンタナ大学来学

4月5日／ 英・リーズ大学来学

6日／ 国際課、新入生対象シンポジウム「留学のススメ～チャンスをつかもう～」を開催

11日／ 留学生センター、留学生チューター説明会を開催

チューターは、留学生の学習・生活面のサポートを行う熊大学生で、現在約80名が登録しています。

5月10日／ ジェーン・ナイト教授（トロント大学）による、高等教育の国際化に関するセミナーを開催

17日／ 豪・ニューカッスル大学長来学

18日／ 阪口副学長、中国・同済大学百周年記念式典に出席

22日／ 国際課、シリーズ留学説明会「留学のススメ～留学生に聞いてみよう～」を開催

熊大学生を対象とし、全6回を予定しています。

29日／ 国際課、シリーズ留学説明会「留学のススメ～交換留学についてもっと詳しく知ろう～」を開催

H19.6.8 現在

図書館業務の研修（マッセー大学）

課に異動する前は熊本大学附属中央図書館に配属されていて、海外からの留学生の利用に際して、もっと自分が役に立てないかと考えていたそうです。

そこで、今回の海外派遣では、自分なりの研修テーマとして図書館業務の研修を希望していました。

「業務研修といっても、私の場合、業務そのものをお手伝いすることまではいかず、どういう応対をしているのかなどを見せていただくことが主でしたけれど…」と謙虚な坂﨑さん。図書館での研修やランゲッジセンターでの研修中に、「勉強はどう？」「ホームステイ先はどう？」など、何かにつけて話しかけてもらったことで、ホームシックやカルチャーショックを乗り越えられたことから、自分も留学生たちに積極的に声をかけ、少しでも支援できるようになりたいと思ったそうです。「そういう"心遣い"は、外国人であろうと日本人であろうと、だれに対しても必要なことだと思います。また自分がどの部署でどんな仕事をしていても、大切なことだとも思います」という坂﨑さん。海外研修生の立場を経験したからこそ気づいたともいえるこの"心遣い"の視点を活かし、今後、熊本大学の国際化の推進に向けて、大きな力となり、支えとなってくれることでしょう。

熊本大学事務系職員海外研修

本学では、法人化前から事務系職員の国際的な業務能力強化に取り組んでおり、その一環として事務系職員海外研修を行っています。本研修では、職員は交流協定を結んでいる海外の大学に約2か月間滞在して異文化環境の中で語学と業務に関する研修を行います。研修後、職員の意識は確実に変化し、最終的な目標である国際業務に求められる企画力、交渉力、判断力を総合的に高めることへの第一歩となっています。

事務系職員海外研修実績

派遣年度	人数	派遣先・国名
H15	1	アルバータ大学（カナダ）
H16	1	アルバータ大学（カナダ）
H17	1	マッセー大学（ニュージーランド）
H18	1	マッセー大学（ニュージーランド）

Information

OPEN CAMPUS

オープンキャンパス

平成19年8月7日(火)

当日自由参加(無料)です。

本荘・九品寺キャンパス

医学部医学科

- ●開催時間 / 9：30～12：00
- ●集合時間 / 9：20
- ●集合場所 / 医学部基礎第一講義室

医学部保健学科

- ●開催時間 / 10：00～12：10
  13：30～15：40
- ●受付時間 / 9：30～9：50
  13：00～13：20
- ●集合場所 / 保健学科玄関ロビー

大江キャンパス

薬学部

- ●開催時間 / 13：00～15：30
- ●受付時間 / 12：15～12：45
- ●集合場所 / 薬学部正面玄関

黒髪キャンパス

文学部

- ●開催時間 / 13：00～16：30
- ●集合時間 / 12：50
- ●集合場所 / 文法学部
  A-1、A-3、B-1、B-2 教室

教育学部

- ●開催時間 / 10：00～12：00
  13：00～15：00
- ●集合時間 / 9：50 / 12：50
- ●説明会場 / 教育学部 570 教室他

法学部

- ●開催時間 / 10：00～12：00
- ●集合時間 / 9：50
- ●集合場所 / 文法学部東側玄関

理学部

- ●開催時間 / 10：00～15：00
- ●集合時間 / 9：50 / 12：50
- ●集合場所 / 理学部玄関前

工学部

- ●開催時間 / 9：30～15：10
- ●集合時間 / 9：00 / 13：00
- ●集合場所 / 工学部２号館１Ｆロビー

法曹養成研究科

- ●開催時間 / 13：00～15：00
- ●開催場所 / 大学教育センター

同時開催

九州地区国立大学進学説明会

10:00～16:00　「熊本大学大教センター１階」特設会場

地元熊本に居ながら，他県の各国立大学の様々な入試情報を得るチャンスです。皆さん奮ってご参加ください。

【個別相談ブース】 各国立大学の入試関係教職員が，参加者からの各種相談・質問などにお答えします。

参加(予定)大学 / 福岡教育大学・佐賀大学・長崎大学・鹿児島大学・琉球大学

【資料配布コーナー】 各大学・学部等の概要，資料などのパンフレット類を自由に持ち帰ることができます。

参加(予定)大学 / 福岡教育大学・九州大学・九州工業大学・佐賀大学・長崎大学・大分大学・宮崎大学・鹿児島大学
鹿屋体育大学・琉球大学・山口大学・熊本大学

お問い合わせ

〒860-8555 熊本市黒髪2丁目40番1号
熊本大学学務部入試課
TEL(096)342-2146　FAX(096)345-1954
E-mail nyushi@jimu.kumamoto-u.ac.jp
URL http://www.kumamoto-u.ac.jp/

医学薬学研究部の満屋裕明教授が紫綬褒章受章

本学医学薬学研究部の満屋裕明教授が、平成19年春の褒章で、学術分野での功績を称える紫綬褒章を受章しました。

満屋教授は世界初のエイズ治療薬の発見者でもあり、その後、2剤のエイズ治療薬を発見したほか、2006年8月には、既存の薬が効かない多剤耐性エイズウイルス（HIV）にも高い効果を示す「抗HIV薬（ダルナビル）」を米国の研究者と共同で開発しました。

米国の臨床試験で高い治療効果がみられたダルナビルは既にFDA（米国食品医薬品局）に承認され、今年秋には日本でも臨床に導入される見込みです。

EVENT 掲示板

工学部

夏休みの自由研究に関する技術相談会

中学生が考えた夏休み自由研究実施計画について、工学部内の実験・工作装置の提供や実験技術の指導を行うほか、必要に応じて教員サイドからの理論的アドバイスをします。

■開催日時：平成19年7月28日（土）～29日（日）
午前9～午後5時
■会場：熊本大学工学部百周年記念館多目的ホール
■問い合わせ先：工学部技術部
（TEL・FAX.096-342-3903）
■参加対象者：中学1～2年生
■事前の申込：必要（飛び入り参加も可）　■参加費：無料

沿岸域環境科学教育研究センター

ひがたのいきもの観察会

干潟でカニやヤドカリ、貝などの生きものを観察します。

■開催日時：平成19年7月29日（日）と8月29日（水）
（どちらも午後1～3時）
■会場：天草ビジターセンターと永浦干潟
（上天草市松島町）
■問い合わせ先：天草ビジターセンター
（TEL.0969-56-3665）
■参加対象：小学生以下
■事前の申込：必要　■参加費：200円

大学院自然科学研究科

青少年のための科学の祭典・熊本大会2007

科学の実験や科学工作など、子どもたちが自ら参加し楽しむことのできる約70の実験ブースを出展し、自然科学のおもしろさを体験していただきます。

■開催日時：平成19年8月18日（土）～19日（日）
午前10～午後5時
■会場：グランメッセ熊本
■問い合わせ先：大会事務局（熊本大学大学院自然科学研究科）
（TEL.096-342-3394
Mail:myoshida@sci.kumamoto-u.ac.jp）
■参加対象者：特に限定しません
■事前の申込：不要　■参加費：無料

沿岸域環境科学教育研究センター

海ほたるの観察会

夜の海岸でウミホタルを観察し、採集します。

■開催日時：平成19年8月5日（日）と8月23日（木）
（どちらも午後7～9時）
■会場：天草ビジターセンターと樋合海岸
（上天草市松島町）
■問い合わせ先：天草ビジターセンター
（TEL.0969-56-3665）
■参加対象者：小学生以下
■事前の申込：必要　■参加費：200円

教育学部

くまもとものづくりフェア

ものづくり教育にもっと興味を持ってもらおうと、幼稚園児・小学生を対象としたものづくり教室を開催します。

■開催日時：平成19年8月25日（土）
■会場：くまもと工芸会館（川尻）TEL.096-358-5711、096-358-5712
http://www.city.kumamoto.kumamoto.jp/sangyo/kanren/kougei.html
■熊本大学での問い合わせ先：熊本大学教育学部　田口研究室
（TEL.096-342-2657）
■参加対象者：幼稚園～小学生　■事前の申込：不要　■参加費：無料

Book Vol.17

おすすめの一冊

民俗学の旅

講談社学術文庫

五高記念館准教授
岩﨑 竹彦

2007年（平成19）は「旅する民俗学者宮本常一」の生誕100年にあたる。だからというわけではないが、ここではかれの膨大な著作の中から、とくに私の好きな『民俗学の旅』を紹介することにしたい。

本書は、宮本が古稀を迎えんとするころに著した自叙伝であり、先祖のこと、家族のことから書き起こしている。かれは1923年（大正12）、ふるさとの周防大島を出て大阪へ行くが、それまで祖父と両親から多大の影響をうけていた。とくに父善十郎からは「先をいそぐことはない、あとからゆっくりついていけ、それでも人の見のこしたことは多く、やらねばならぬ仕事が一番多い」という教えをたびたび聞かされ、かれにとってその後の人生の方向づけになったという。「われ先に」と急ぐ人が多い世の中にあって、耳を傾けるべき言葉ではないだろうか。

宮本は1935年（昭和10）、終生の師と仰ぐ渋沢敬三と出会い、以後公私にわたり面倒をみてもらうことになる。戦後、日本が軍備の放棄をすすめているとき、宮本は「軍備を持たないで国家は成り立つものでしょうか」と渋沢にたずねている。渋沢は「軍備を持たないでどのように国家を成立させていくかをみんなで考え、工夫し、努力することで新しい道が拓けてくるのではないだろうか。それを国民一人一人が課題として取り組んでみることだ。その中から新しい世界が生まれてくるのではなかろうか」と語ったという。そして宮本は「ただ戦争反対、軍備反対と叫んだだけで戦争はなくなるものではない。一人一人がそれぞれの立場で平和のためのなさねばならぬことをなし、お互いがどこへいってもはっきりと自分の是とすることを主張し、話しあえるような自主性を持つことであり、周囲の国々の駆け引きに下手にまきこまれないようにすること」が大切だと述べる。

また「農地解放問題」について、夫や子どもが戦争にとられ、わずかばかりの土地を近所の農家にあずけたところ、そのまま取り上げられてしまった人たちのことにふれ、人の目の届かないところで弱者が犠牲にされてしまった実情をありのまま報告している。こうしたことは教科書に記されない歴史の裏側であって、日本の農村をつぶさに見て歩いた宮本でしか語ることのできない事実であった。

さらに民俗学や文化人類学はお互いの生活の中から共通項目を見出し、その上で何が異質なものを生んだかを探りあて、正しい相互理解と連帯感を打ち立てていかなければならないと述べる。それは国際平和の第一歩であった。宮本は死の床にあって「退院をしたら、米食文化圏の東アジアをくまなく歩いてみよう」と弟子に語っていた。残念ながらその願いは果たされることなく、宮本常一の人生の旅は1981年に73歳で終焉を迎える。もし東アジアの旅が実現していれば、我々にとって大きな財産となったことはいうまでもない。

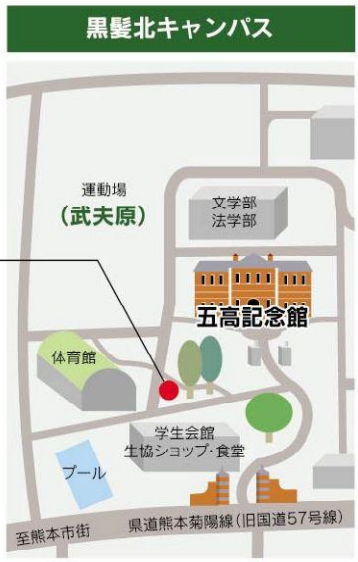
本書は、学問はどうあるべきか、民俗学はどうあるべきか、あるいは日本人が幸せに生きていくためになにをなすべきか、物事を一方向からだけでなく多角的に見つめ、弱者にかぎりない愛情を注ぎつつ日本人のあるべき姿を追求した宮本常一を知る最適の書である。平易な文章で綴られているので読みやすく、一晩か二晩で読みおえることができるだろう。

CAMPUS 歴史さんぽ

「武夫原頭の歌碑」

草萌え花香るところ
青春の意気あふるる剛健の質

昭和62年（1987年）、旧制第五高等中学校百周年の年、寮歌「武夫原頭（ぶふげんとう）に」の歌碑が建立されました。「武夫原頭に草萌えて　花の香（か）甘く夢に入り」で始まるこの歌は、「巻頭言」とともに永く愛唱され、剛毅朴訥（ごうきぼくとつ）の熊大スピリッツを今に伝えてきました。



五高記念館に「熊本大学歴史散策マップ」がおいてあります。

編集後記

今年 1 月から、本誌の編集に携わっています。取材で先生方に研究のお話をうかがう度に、『へぇ～、こんな研究をなさっていたのか』とか『すごい研究だな～』とあらためて感動しています。そして、その度に、小学６年生のわが娘、毎日遊び呆けているこの娘が“万が一”本学に合格できたら、「この研究室にぜひ入って欲しい！」、「あ、絶対この先生！この先生の研究室に」、「うん、この先生の研究もすごい！ここに入れたらなあ…」と思ってしまいます。

もちろん、それは先生方に対してだけではなく、【卒業生を訪ねて】でお会いする本学卒業生に対しても同じです。「熊大にはこんなすごい卒業生がいるんだ。うちの娘もこんな風に成長して欲しいなあ…」と、いろんな方にお会いする度に傾倒してしまうのです。

我ながら、人の影響を受けやすく優柔不断な性格だなとも思いますが、取材を通して『へぇ～』、『すごい！』と感動したことを、皆様にもお伝えできるように、これからも取り組んでいきたいと思います。今後とも、本誌「熊大通信」をどうぞよろしくお願いします。

（企画部企画課　中村直美）

編集委員

粂　和彦　発生医学研究センター

田中尚人　大学院自然科学研究科

田村耕一　法学部

西村兆司　広報戦略主幹

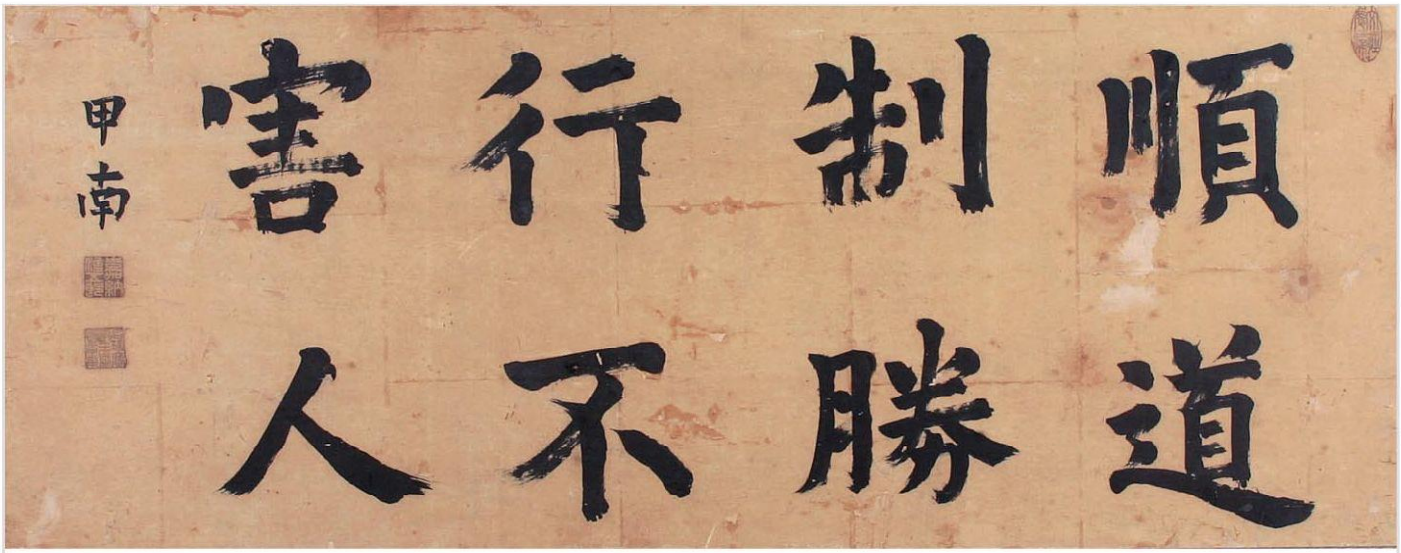
熊本大学広報誌
熊大通信
KUMADAI TSUSHIN

皆様のご意見・ご感想をお寄せください。

2007年7月発行　編集・発行 / 熊本大学

〒860-8555　熊本市黒髪2丁目39番1号　TEL.096-342-3119　FAX.096-342-3007
sos-koho@jimu.kumamoto-u.ac.jp

熊本大学公式ホームページ
http://www.kumamoto-u.ac.jp/



道に順(したが)いて、勝ちを制す。行(ゆ)いて人を害(そこな)わず。

五高第三代校長・嘉納治五郎（かのう　じごろう）は
講道館の創始者であり、日本最初のＩＯＣ委員である。
大柔道場「瑞邦館」をつくるなど
五高のスポーツ隆盛に力を尽くした。
柔道場には、彼が揮毫した
「順道制勝行不害人」の額が掲げられた。
また、かの小泉八雲を熊本に招いたのも、彼である。
八雲によって欧米にも紹介された
「逆らわずして勝つ」という嘉納校長の柔道観は
そのまま、人としての生き方にも当てはまる。
嘉納校長の薫陶による「しなやかな強さ」という精神が
幾多の研究を生み、人材を育ててきた。

五高は今年120周年を迎えます

五高記念館は国の重要文化財に指定され、本学のシンボルとなっています。このほかにも、重要文化財等の赤煉瓦建物群や登録文化財となっている建物、また、他のキャンパスで保存・活用されている施設があり、これらの建物・施設・資料等から成る熊本大学博物館の実現を目指しています。その第一歩として、平成 18 年度から五高記念館の整備に着手し、高等教育研究資料館としての個性を持たせ、ラフカディオ・ハーンや夏目漱石など、いくつかのテーマごとに史・資料の整備を進め、展示・公開しています。

[開]10：00～16：00（入館は～15：30）［休］火曜、年末年始
※3～10月の祝日と11～2月の土・日曜と重なる祝日は開館　入場無料
TEL：096-342-2050　　HP　http://www.goko.kumamoto-u.ac.jp/

熊本大学ユニバーシティ・ミュージアム

R100 古紙配合率 100%の再生紙を使用しています。